

The page features three blue, 3D-rendered spheres of varying sizes. The largest sphere is at the bottom right, the medium one is at the top center, and the smallest one is in the middle. Thin blue lines extend from the top left and top right corners towards the spheres, creating a sense of depth and connection.

干支の活学

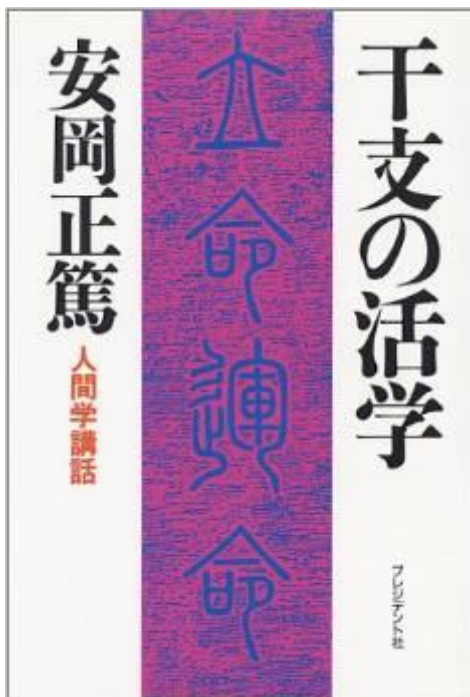
安岡正篤

干支は占いではなく、易の俗語でもない。それは、生命あるいはエネルギーの発生・成長・収蔵の巡回過程を分類・約説した経験哲学ともいべきものである。

谷口 健太郎

2016/01/21

Ver.2



本来の干支は占いではなく、易の俗語でもない。それは、生命あるいはエネルギーの発生・成長・収蔵の巡回過程を分類・約説した経験哲学ともいべきものである。

即ち「干」のほうは、もっぱら生命・エネルギーの内外対応の原理、つまり challenge に対する response の原理を十種類に分類したものであり、「支」の方は、生命・細胞の分裂から次第に生体を組織・構成して成長し、やがて老衰して、ご破算になって、また元の細胞・核に還る——これを十二の範疇にわけたものである。

干支は、この干と支を組み合わせてできる六十の範疇に従って、時局の意義ならびに、これに対処する自覚や覚悟というものを、幾千年の歴史と体験に徴して帰納的に解

明・啓示したものである。（「干支の活学」序文）

十干・十二支

十干に五行思考が結びついて

五行思考 木、火、土、金、水

「行」は行動の意であります。人生、自然の営む活発な作用、行動、力これが五行でこれが、兄弟(えと)に分かれて配されております。

内外エネルギーの発展段階における内外対応の状況を分類してもの。

	兄 (え)	弟 (と)
木	甲 きのと	乙 きのと
火	丙 ひのえ	丁 ひのと
土	戊 つちのえ	己 つちのと
金	庚 かのえ	辛 かのと
水	壬 みずのえ	癸 みずのと

甲・きのえ

甲はよろいで、鎧をつけた草木の芽が、その殻を破って頭を少し出したという象形文字で、これを人事に適用いたしますと、旧体制が破れて、革新の動きが始まることを意味しておる。そこでこれを実践的に考えると、この自然の機運に応じて、よろしく旧来のしきたりや陋習(ろうしゅう)を破って、革新の歩みを進めねばならぬという

ことになるわけでありませう。

乙・きのと

出した芽が、まだ外界の抵抗が強いために、真っ直ぐに伸びないで曲折しておる。乙という字は草木の芽が曲がりくねっておる象形文字です。だから、新しい改革創造の歩みを進めるけれども、まだまだ外の抵抗力が強い。しかしいかなう抵抗があっても、どんな紆余曲折をへても、それを進めてゆかねばならぬということでありませう。

丙・ひのえ

丙は乙より進んで陽気の発展した象。丙は炳（あきらか・つよし）を意味するが、文字の成り立ち＝一・冂・入が示すように、一は陽気、冂は囲い、物盛んなれば衰うる理で、陽気がすでに隠れ始めていることを意味する。

丙は一昨年、昨年の陽気が一段とはっきり発展することでありませう。それが「丙」。そこで「丙は炳なり」と炳の文字をあてはめてある。あきらかとか強いかといういみでありませう。

たとえば、われわれの生命力が伸びて成長するということは、同時にこれは老衰するということに通じる。丙は昨年の乙に比べて陽気が明らかに伸びるのであるが、しかしもうその時すでにこの陽気が囲いの中に入るわけで、また入れなければいけない。つまり盛んな陽気がだんだん内に入っていくことを表しておる。物は盛んな時には必ず衰える兆しを含んでおる。だから盛んになったかといって有頂天になることを教

えはもっとも愚としておるのでありませう。

丁・ひのと

丁は一と」とかからできておる。一は従来の代表的な動きがなおまだ続いておることを表し、昨年の丙の上の一の続きと解してよるしい。」はその在来の勢力に対抗する新しい動きを示しておる。つまり「丁」という字は、新旧両勢力の衝突を意味しておるわけです。だから丁が在来の勢力を意味する時には、さかん豊美、壮丁などというk熟語もある。

<以下、同様に十干を読み込んでください>

十二支

たとえば「子」というのは茲という文字の下に子をつけた孳と同じで、増える、すなわち細胞が分裂・発達する能動性を表す文字であり、それがいろいろに組み合わせられてさまざまの組織・器官をつくってゆく、これが「丑」、実はいとへんの紐であります。それがぐんぐん発達するのが「寅」。寅は演・續（ながい）と同じ意味です。こうしてだんだん発達していって、また元の細胞・核に還る、つまり「亥」になるわけでありませう。

午

午は上の自覚は地表、下の十は一陰が陽を冒して上昇する象である。すなわち、反対勢力の高まりを示す。

未

未も上の短い一と木とからなっておって、一はやはり木の上層部、すなわち枝葉の繁茂をあらわしておる、ところが枝葉が繁茂するとくらくなるから、未をくらいと読む。未は昧(くらい)に通ずる。つまり支の「未」は、暗くしてはいけない。不昧(ふまい)でなければならぬ、ということをお我々に教えてくれているのです。枝葉末節を払い落として生々たる生命を進呈させるところにある。

申

申は伸で、新しい力の進展・チャレンジを表します。

甲午

昨年「甲午」の年は、ちょうど春になって、新芽が古い殻から頭を出すのであるが、まだ余寒が厳しくて、勢いよくその芽を伸ばすことができないと同じように、旧体制の殻を破って、革新の歩を進めなければならぬのであるが、そこにはいろいろの抵抗や妨害があるために、その困難と闘う努力をしながら、慎重に伸びてゆかねばならぬということでもあります。

つまり革新的歩みを進めるに当たっての外界の妨害や抵抗、それとの交渉、動揺を表している。したがってこれは、自然の機運と共に、人間の使命・実践の問題であります。大いに指導者の「胆識」が問われる年なのです。

乙未

「乙」の語源は乙形の骨ペラで、糸の乱れを解く道具の象形で、「乱」をおさめると読

む根拠となる字であるといわれる。

許(きょ)慎(しん)の「説文解字」に「春に草木、婉曲(えんきょく)(まがること)して出ずるも、陰気なお強く、その出ずること乙(いつ)乙(いつ)(でにくいさま)たるを象る」と説明している。つまり春の初め、草木の芽が甲鱗を破って出かかるのであるが、寒気がお強く、真直ぐに伸びかねて、曲がりくねった形になっている。その芽の象形と見たのである。

一方、支の「未」は、分解すれば一と木で、一は木の上部・枝葉の繁茂を表す。枝葉が茂ると暗くなるから未は昧(まい)に通ずる。そこで「未」は、暗い事を排して明るくしてゆかねばならない。不昧(ふまい)にしなければいけない。

不昧(くらまさず)と言う語は広く普及して、雲州松平公が「不昧」と号し茶道に「不昧流」という流派を生じている。

そうしてみると今年の「乙未」は、いかに下界の抵抗が強くとも、それに屈せずに、弾力的に、諸事、筋を通して、曖昧や暗いことを排し明るくしてゆかねばならぬ、不昧にもってゆかねばならぬ。と言うことを意味しておるわけでもあります。

丙申(ひのえさる)

丙(ひのえ)

丙午(ひのえうま)が今だに世上の問題になっている。多くの人々が、この年に生まれ

た女は夫にたたる、ひどいのは殺してしまうという伝説に、少なくとも内心に危惧を感じておることは、事実である。

元来干支=十干・十二支は、生命あるいはエネルギーの生長収蔵すなわち変化の過程を系統的に分析したもの。

昨年干「乙・きのと」は草木の芽が新しい陽気に逢うて古い殻を破って頭を出した甲(きのえ)が、外の寒気の抵抗のために真っ直ぐに伸びられなくて曲折している姿です。

旧体制を打破して新しい創造発展に努むべきことを意味する。

丙は乙より進んで陽気の発展した象。丙は「あきらか、つよし」を意味するが、文字の成り立ち一・冫・入が示すように、一は陽気、もんはかこい、もの盛んなれば、衰える理で、陽気が既に隠れ始めていることを意味する。

我々の生命力が伸びて成長するということは、同時にこれは衰退するということに通じる。丙は昨年乙に較べて陽気があきらかに伸びるのであるが、しかしもうその時すでにこの陽気が困いの中に入るわけで、また、入らなければいけない。物は盛んな時に必ず衰える兆しを含んでおる。だから盛んになったからといって有頂天になることを教えは最も愚としておるのであります。

申

申は伸びると同じで、伸びるという意味であります。新しい力の伸展・チャレンジを

表します。真っ直ぐ引き伸ばす、すなわち体を成す形容である。前年の未が、木の幹枝の茂りを表す意で、それを整成することをあきらかにするものである。申の後に酉となる。酉の象形文字を見れば明白であるが、徳利の形を表し、醸熟・成熟を意味する。

六然

それで、今年大事になることが、六然でいう「得意愴然(とくいたんぜん)」得意なときほど、静かで安らかな気持ちでいること

参考までに、六然とは、崔 銑(さいせん、中国古代の学者)の残した言葉とされている。

ちなみに、安岡 正篤(やすおかまさひろ)氏の座右の銘

六然の六つとは、

「自処超然(じしよちょうぜん)」

自分自身に関しては、世俗の物事にとらわれないようにすること

「処人靄然(しよじんあいぜん)」

人に接しては、相手を楽しませ心地よくさせること

「有事斬然(ゆうじざんぜん)」

何か事があるときは、ぐずぐずしないできびきびとやること

「無事澄然(ぶじちようぜん)」

何も事がないときは、水のように澄んだ気でいること

「得意愴然(とくいたんぜん)」

得意なときほど、静かで安らかな気持ちでいること

「失意泰然(しつたいぜん)」

失意のときにも、泰然自若としていること

ちなみに

丙午

午

地表をあらわす。十の一は陽気で、1 は陰気が下から突き上げてまさに地表に出ようとする象形文字

ひのえうまが合わさると、在来の支配的勢力が大いに伸びて盛んになるが、反面にそれに対する反対勢力が内側から突き上げてきておることになる。一見、たいそう栄えて、あきらかで強いように見える在来の代表勢力であるけれども、すでにもう下からの突き上げにあっている。